



自然と共存するメリット

吉 成 翼

(横手市地域おこし協力隊)

1 地域おこし協力隊との出会い

2021年10月に首都圏よりUターンし協力隊に着任しました。私はこの横手市で充実した幼少期を過ごせたと記憶しています。放課後はだっぴろい校庭を縦横無尽に駆け回り、お盆は家の前で花火を、庭でバーベキューをしていればお隣さんが参加して来たり、近所のおばあちゃんの家に行ってお絵描きをしたり。首都圏に住んでみて、そのどれもがなかなか叶わないことがショックだったのと同時に、田舎暮らしの幸福度に気付かされました。

高校までは部活動に明け暮れ、卒業後は『飛行機のそばで働きたい!』という夢を叶えるため、宮城県岩沼市の専門学校へ進学し、私はそこで東日本大震災を経験します。19歳ながらに初めて死を覚悟した日でした。屋外で授業をしていた時に大きな揺れで立てなくなり、そこに地割れが襲ってきては遠くに見える防風林がパタン、パタンと倒れ、真っ黒い海が同級生の車や学校の飛行機をかつさらっていきました。

波の音が落ち着いたかと思えば、季節外れの雪が降り、ヘリコプターが上空を飛び回る。体育館のギャラリーで一晩過ごし、翌朝は気持ちがいいほどの晴天。そんな中4時間かけて避難所まで歩いたことを今でも覚えています。その経験からいつか東北のためになることがしたいと思っていました。

震災後、私の夢は無事に叶い、羽田空港でグランドハンドラーとして働き始めます。そこで

国際線業務を担ったこと、社員旅行でグアムを訪れたことをきっかけに、今度は海外に興味を持ち始め、そして23歳のときにN G Oピースボートが行う世界一周の船旅に参加しました。

大海原に何日も揺られると、自分の小ささや無力さを感じ、小さなことでクヨクヨしていることが無駄なように思えました。そして、『とぼけてるのか?』と思うくらい日本は治安のいい国だと実感しました。また、当時の私は政治経済や環境問題などにはほとんど興味がありませんでしたが、同世代のみんなと船上で貧困や差別、政治の問題について考え、刺激を受けたことで、いつか地域に寄り添う仕事がしたいと思うようになっていました。帰国後は航空関係の仕事に再就職しましたが、その思いを忘れることはありませんでした。そんな気持ちのまま何年か経過した頃、旅で出会った友人らの活躍が目にとまるようになりました。それが地域おこし協力隊でした。



(世界一周の船旅で訪れたモンテネグロ)

2 秋田県横手市を選んだ理由

このまちの空気感をなんとなく知っていることが大きな決め手になりました。移住先は沖縄県や首都圏も検討しましたが、協力隊のねらいは活動後もその地域へ定住することです。地元への定住後の暮らしはとてもイメージしやすかったです。また、前述のように幼少期は地域の方々にたくさんお世話になり、その方々とまた一緒に過ごしたい気持ちがずっと心の隅にありました。そう思えたのもきっと、このまちの大人たちがよく笑っていた記憶があるからだと思います。

3 住んでみて

私が移住前に住んでいた横浜市は非常に坂が多く、最寄り駅には有名な楽曲の歌詞にも使われた坂道があるところでした。それに比べると横手市は本当に坂が少なく、見通しの良い道が続いています。坂がないだけで暮らしやすさがこんなに違うとは思いませんでした。それが日本一の広さを誇る横手盆地の良さのひとつなのかもしれないです。

しかし、夏は暑く、冬は寒いという寒暖差の激しい特別な気候には、私自身正直いまだに悩まされていますが、実はおいしい農作物を育てるためにはとても良い環境であるということは、移住したからこそ知ることができました。



(キャンディーみたいな野菜たち)

4 協力隊活動を通して

協力隊での主な活動は横手市の魅力を伝える情報発信。私は母方の実家が大きな稲作農家だったため、自然と農業に魅せられ、その分野をメインに発信を続けています。横手市は農業が盛んな地域ですので、さまざまな農家さんとの出会いがあります。また、中高生向けの情報紙の制作をきっかけに、地元企業などへ取材に訪れる機会がありますが、どこへ行っても本当にあたたかい人が多いと感じています。そのたびに、改めて私は地域に育ててもらっていたんだと嬉しい事実を知ると同時に、活動に気持ちが乗るようになっていきました。

協力隊になったばかりの頃は、写真や動画の撮影に苦手意識がありましたが、日を追うごとに撮りたいイメージが浮かぶようになりました。それは『日常』を写すということ。当たり前にある風景や、その人のいつもの姿勢、笑顔を切り取りたいと思うようになりました。そう思えたのは、関わってくれている農家さんの屈託のない笑顔と作物に対する愛情をたくさん見てきたからだと思います。

農業をもっと身近に感じたいという思いから、私のデスクは横手市園芸振興拠点センターにあります。そこに勤務し始めの頃、ブルーシートに覆われた肥土を圃場に散らす作業をしていた時のことです。肥土の奥にはなんとネズミの家族が住んでいて、見つけた瞬間、親ネズミたちは『びゅーん！』とそこから逃げて行ったのですが、それを見逃さなかったのがカラスです。直滑降で飛んできてはネズミをかつさらっていききました。ほんの一瞬の出来事でした。自然の恩恵を受け、食卓を彩る野菜を当たり前のように食べていること自体も食物連鎖の過程であり、また、植物や野生動物の自然と私たちは共存していることを訴えているようでした。

農業をすること、農家さんと出会うことで新たな発見と感情にも出会います。酷暑は農作物にとってもつらいことを知ったり、熊に対する恐怖心を感じたり。自分が好きな『農業』をちゃんと見つめてみることで、自分がどうして農業に関心を持ったのかを考えるようになりました。そんなときに出会った言葉が『センス・オブ・ワンダー』。神秘さや不思議さに驚嘆する感性を意味する言葉です。大人になると自然という力の源泉から遠ざかり、人工物に夢中になってしまいがちですが、この感性はそれに対する解毒剤のようなもの。子どもの頃は不思議さに目をみはり、分からないことはとにかく知りたかったと思っています。しかし、大人になると常識や真実、正しさに振り回され、好奇心がどんどん色褪せていく。本来私たちはもっと自由で、個で考え、想像するべきはずなのに。土や植物に触れ続けることで、私の中のワクワクの根源を知り、さらにはこの土地に根差した人たちの想いに寄り添えているような気持ちになります。



(大好きなカレー用のスパイスを育てました)

5 自然を求めることは私の本能

横手に移住する前から休日は海や森、滝などの自然を求めてでかけることが多かったです。家にいても窓際で日光浴をする日もしばしば。そんな私でも、移住したことで心身ともに健康になれたと感じています。自身の行動を振り返ると、どうして私は自然を求めるんだろうと考

えるようになりました。ある記事を読んだとき私が思ったのは、田舎育ち、都会育ちに関係なく、現代の人間にはまだ自然が必要だということ。『自然』について考える機会が減っているのは、利便性や効率性を求め続けている現代社会が招いた結果なのかも、と。人間はコンクリートに囲まれ始めてからわずか100年ほどしか経過していません。その生活に適応するには短期間すぎて今の人間には過酷なんだとか。だから、現代病と言われるはつきりと姿を見せないストレスに頭を抱えるのは当然のことものようにも思えます。生活はちょっぴり不便なほうが意外と心地いいと思うのは、きっと私だけじゃないのではないのでしょうか。自然のそばで暮らすことは、体を動かし、心を安らげてくれているはずです。



(自然に囲まれた中での撮影はワクワクします)

6 最後に

地元に帰ってきたことで、疎遠になっていた同級生や同世代の方から連絡が来ることも増えました。また普段お会いできないような方々との出会いは、その先に新たな出会いが生まれ、木の枝のように派生しているように感じています。

また、農業が盛んだということは植物にとっていい環境ということ、つまり横手市は人間も健やかに暮らせる場所なんだと実感しています。大好きな太陽の下で働き、自分の思いを好きな形で発信できる協力隊の活動は、自分らしさに気付かせてくれる時間です。